

Paddy and Water Environment 誌の2023年の現状と今後の展望

The status quo and perspectives of Paddy and Water Environment journal in 2023

飯田俊彰
Toshiaki IIDA

1. はじめに

Paddy and Water Environmentは、2003年の創刊以降、モンスーンアジアの水田農業研究の成果の世界への情報発信を目指し、農業農村工学会のサポートを得て発刊されてきた。この間、インパクトファクター（IF）の取得と向上を着実に実現し、水田稲作と稲作地帯での水環境の分野をカバーする英文誌としての地位を確立してきた。現在は、Springer社が発刊する国際誌として一定の評価と位置付けを得ている¹⁾。2022年7月に、増本前委員長からEditor-in-Chiefを引き継ぎ、またChief Managing EditorにはNational Taiwan UniversityのChihhao Fan氏が就任し、日本、台湾、韓国の3カ国の編集委員も再編成された。本稿では、主として2023年時点での本誌の現状を報告するとともに今後を展望する。

2. 本誌の発刊と評価の現状

2.1 掲載論文数 本誌は、創刊から2023年までに毎年4号ずつ21巻を発刊した。2023年には第21巻の1～4号が発刊され、40報の論文等が掲載された。その内訳は、Articleが37報、Correctionが1報、Reviewが1報、Technical Reportが1報だった。一方、2023年の本誌への総投稿数は187報で、その内訳は、Articleが170報、Reviewが11報、Short communicationsが1報、Technical reportが3報、N/A（適用外）が2報だった。直近3年間の総投稿数は、185～190報でほぼ安定していたが、2018～2020年の3年間に比べて約22%減少した（Table 1）。投稿された論文の筆頭著者の所属国は全世界に及び、2023年に投稿が多かった国の上位5カ国は多い順にインド、イラン、日本、中国、韓国だった。2023年に掲載可となった論文の筆頭著者の所属国の上位3カ国は多い順にインド、日本、

Table 1 PAWE への投稿状況と採否決定までの日数

Table 1 Submissions and days to decision

Year	2018	2019	2020	2021	2022	2023
Total Submitted	236	256	230	190	185	187
Total Decided	214	248	209	186	132	157
Accept	57	42	49	48	32	44
Reject	157	206	160	138	100	113
Acceptance Rate (%)	27	17	23	26	24	28
Average Days to First Decision (By f.d.d.) (d)	75	49	56	66	54	73
Average Days to Final Disposition Accept (By f.d.d.) (d)	282	295	236	224	210	204
Average Days to Final Disposition Reject (By f.d.d.) (d)	63	36	48	53	37	75

*f.d.d.: final decision date

岩手大学農学部 Faculty of Agriculture, Iwate University

キーワード：PAWE, 掲載論文, 査読プロセス, インパクトファクター

イランで、続いて中国とバングラデシュが同数で4位だった。

2. 2 査読プロセス Table 1に示す通り、2023年に査読結果が出た論文数は157報だった。うち、Acceptが44報、Rejectが113報で、採択率は28.0%だった。過去6年間の平均の採択率は23.7%(272/1146)で、2023年には採択率は平年に比べてやや高かった。投稿から判定までの日数を見ると、2023年には最初の判断までには平均で73日を要し、Acceptの最終判断までには平均で204日、Rejectの最終判断までには平均で75日かかった。判定までの時間の変化を直近6年間と比較すると、Acceptの場合には短縮されているが、Rejectの場合には少し長くなった。引き続き、査読やハンドリングの効率化、迅速化を進める必要が有る。

2. 3 IF 本誌のJCR IFは獲得年(2012年)の0.986から変動し、2015年には0.871へ低下したが、2019年以降の直近4年間には連続して上昇し、2022年には初めて2を超えて2.190に上昇した(Fig.1)。2022年には、Citations(IF計算の分子)が2021年より増加して250件を超えたのに加えて、Citable items(IF計算の分母)が減少したため、IFの大幅な上昇に繋がった。ちなみに、Citable itemsが2021年と同数だったとして計算したIFは1.716である。Citationsが増加したことは望ましいことであるが、Citable itemsが減少したことは、この後に引用されるべき論文の数が減少したことを意味しており、IFの値を同程度に維持するためには1報当たりのCitationsが増加しなければならないことを意味する。2022年に掲載された論文が少数精鋭で今後多く引用されることを期待した

い。IFによるランクは、2022年には、Agricultural Engineeringカテゴリーでは14誌中8番目、Agronomyカテゴリーでは88誌中36番目で、特にAgronomyカテゴリーでは2021年の90誌中58番目から大きく上昇した。ライバル誌を抜いて世界の学術誌中でのランクが上昇したことは喜ばしいことである。本誌は、Journal self cites (PAWEに掲載

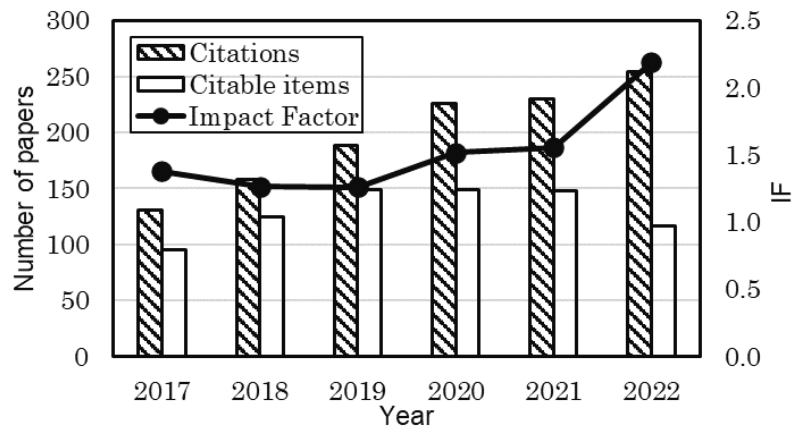


Fig.1 PAWE の Impact factor (IF)の推移
Fig.1 Changes in Impact factor of PAWE

されている論文同士での引用)を除いて計算したIFでも2022年には2.1という高い値を示しており、また、年間の論文ダウンロード数は2022年には88,397件、2023年には101,811件と、一貫して増加傾向にある。世界の幅広い読者から本誌が注目されていることが分かる。

3. おわりに 2022年には本誌のIFが創刊以来初めて2を超え、2.2へ大幅に上昇した。しかし、IFの上昇原因の一つにCitable itemsの減少も挙げられ、今後のIFの推移には注視が必要である。本誌への注目度が高まっていることが数字からも示されたが、さらに本誌の魅力を高めIFを向上させるため、Review paperや特集号などの企画、Invited papersの検討等と同時に、的確かつ迅速な査読プロセスの運営が必要と思われる。

引用文献

- 1) 飯田俊彰(2023):Paddy and Water Environment誌の現状と今後の展望, 2023年度農業農村工学会大会講演会講演要旨集, T-13-2, 773-774